病気と闘う人たち

生時（レジェンド）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
病気と闘う人たち

【Ｎコード】
Ｎ９７０１Ｋ

【作者名】
生時（レジェンド）

【あらすじ】
クローン病と戦いながらネット作家をしている河村秀二。
彼は自分の自伝を書くために過去を思い出し始める。

序章　ネット作家秀二（前書き）

僕の今までの出来事を思い出しながら、病気と戦う人たちを描いてみたいと思います。

この物語は作者の人生をモデルにしたフィクションです。
実際の人物・団体などには一切関係ありません。

序章　ネット作家秀二

２０１０年春……

３０代の男性がパソコンに向かい何かを書いていた。
昔の写真を見て、男は何かを思い出そうとしていた。
その男はクローン病という病気を抱えながら、ネット小説を書いているフリーターで、名は河村秀二という。
彼は今、自分の自伝を書くために昔の事を思い出していたのだ。

１９７９年２月２２日……
河村家の次男として彼はこの世に生を受けた。
父は河村重蔵、母は河村蘭、そして５つ上には長男の河村秀一がいた。
彼の父重蔵は格闘技が好きで、子供たち二人と共に少林寺拳法を学んでいた。
特に秀二は格闘映画や格闘漫画の影響もあり、毎日稽古に励んでいた。

彼が９歳のときには、弟が生まれた。
名は河村秀三。
だが、その頃に、秀二は泳げないため少林寺をやめさせられ、スイミングスクールに通わされる事となった。
だが彼はその後も兄に技を教えてもらったり、我流で武道の稽古は続けた。

時は流れ１９９１年……
秀二は中学生となっていた。
１年の時は武道をやっていたのに弱いという理由から、同級性にい

じめられていた。
呼び出され、殴られ、金をたかられる。
そんな日々が続いた。

さらに2年の時には、親が離婚した。
それからの彼は「悪」という存在憧れ始めた。
だが、根性がないため、せいぜい喫煙や飲酒、後は授業をサボるくらいだった。
また、アニメのキャラに恋をするなど、まだ幼い所もあった。

だが、調理師の専門高校に入学してから、彼の性格は変わっていく。
教師による暴力、生徒同士の喧嘩、そんな修羅場の中で、ついには彼自身平気で人を傷つける人間になってしまった。
自分がかつていじめの経験があるのに、今度は彼自身がいじめをするようになってしまったのだ。

そしてそんな悪行を行ったためか、卒業後、パン工場に就職するのだが待っていたのは地獄のような現実だった。

第1章　クローン病（前書き）

現在では看護師、師長と呼ばれていますが、時代の都合でセリフの時には看護婦や婦長と書きました。

第1章　クローン病

１９９７年……
パン工場に勤め始めてから、すぐに嘔吐、腹痛、高熱などの症状が現れた。
地元の病院では原因が分からないため、祖父が通っていた大学病院に検査入院をし、そして医者から悪夢のような事実を聞かされるのだ。

「あなたの病名はクローン病です。残念ながら今の医学では完治しない難病です」
「クローン病？治らない病気……」
さすがにショックだったのだろう。
だがそれでも彼は生きなければいけない。いや、生きていたいと思ったはずだ。

クローン病……消化器の病気で、主に小腸や大腸に潰瘍ができたりし、狭窄つまり、腸が細くなったり、ろう孔と言って腸に穴が開いたりする。
主な治療は点滴による絶食や薬物治療、そして外科的治療である。

入院して2ヶ月が過ぎた頃……
彼の腹痛はひどくなり、結局手術をすることとなった。
術後はまさに地獄だ。
次の日から腸を動かすために、激痛と戦いながら歩かねばならない。
痛み止めも使用したが、その前から使っていたため、効きが悪くなっていた。
2週間近く地獄の毎日を過していたが、痛みは時の流れと共にだんだん弱くなっていった。

3週間目には内科に戻れるほど回復した。
そして、これからは点滴の代わりにエレンタールというまずい栄養剤を6パックも飲まなければならなかった。

だが病室に見舞いに来る悪友たちの前では「うまい！」といいながら、皆に無理やり飲ませていた。
「どこがうまいんだよ秀二！吐くところだっぞ」
「でもこれが俺の飯だから！」
と、馬鹿騒ぎをしていたため、看護師から注意を受けてしまった。
「秀二くん、病室は静かにね」
「スイマセン」
「でも良かったわ。元気になって」
そう言って看護師は部屋を出て行った。
「おい、今の看護婦メチャ綺麗じゃん」
「だろう！早乙女さんて言う人なんだ。本当の担当じゃないけど美人で優しいまさに白衣の天使だ。でも今日は非番だが、僕の本当の担当看護師はおばちゃんだよ。力士みたいな体系して、きっと職場を間違えたんだな。あれじゃ～白衣の力士だよ」
「なんだそれ～でも、婦長とかそんなイメージがあるな」
「でも、ここさ、結構マブイ女いるじゃんか。いいな～俺も入院して～仕事しなくていいし」
その言葉を聞いて秀二の顔から笑顔が消えた。
「おい、俺たちの仕事は病気と戦うのが仕事だ。そういうことはあまり言うなよ」
「ああ～わり～」

数日後……

秀二の様態はかなりよくなり、喫煙所に行けるほどになっていた。
他の患者や付き添いの人たちと喫煙所で馬鹿話をすることが、いつ

の間にか秀二の楽しみとなっていた。
もはや彼の病室は喫煙所だ。
それに対して厳しく注意する看護師もいる。
逆に居場所もわかって秀二が脱走しないと信じあまり何も言わない看護師もいる。
この前の美人の看護師なら「ほどほどにね」と優しく注意するだけで済むのだが、今日は担当の看護師が勤務していた。
そして鬼のような鋭い顔をして喫煙所に現れた。
「河村くん！検温の時間くらいちゃんと病室にいなさい！それにタバコはダメじゃないの。しかもアンタは未成年でしょう」
「はいはい……」
と素直に返事をし、病室に戻るが、数分後にはまた喫煙所に入っていった。

「暇で、しかも飯が栄養剤なんだから、タバコくらいいいじゃん。まったくあの力士は……」
そういいながらタバコに火を点けた。
「フ～うまい！あっ、そういえば最近、元太くんのお母さんもお父さんも見ないけど、元太くんは退院したんですかね～」
「あの子、ちょっと前にＩＣＵに入ったのよ」
「ええ～！大丈夫なんですかね」
その時だった。
元太のご両親が喫煙所に現れた。
元太の母が「お世話になりました」と涙をこらえながら挨拶をした。
誰もが元太の身に何が起きたか察しがついた。
元太の母は秀二の近くに来て涙をこらえながらお礼を言ってきた。
「秀二くんありがとうね。いつもアニメのビデオや漫画を貸してくれて……あの子を遊んでくれて……ありがとうね」
秀二は下を向きながら言葉を探した。
「ぼ、僕のほうこそ、あの子に勇気をもらいました。自分よりも小

さい子が自分よりも難病と闘う姿に……」

秀二はこのとき、はじめて人の命がどれだけ大切なのか、そして生きたくても生きられない人がいるということを知ったのだ。

第2章　告白

元太の死を知り、生きたくても生きられない人がいると知った秀二は、このことを早乙女さんに話した。

「まだ小学生の低学年だよ。なのになんで……」

「秀二くん……」

早乙女は秀二の手を優しく握った。

「早乙女さん、ありがとう。忙しいのに僕の話を聞いてくれて」

「辛い事があったら遠慮なく言って」

「はい」

「じゃ、ナースステーションに戻るわね」

「うん。ありがとう」

今までアニメのキャラにしかときめいた事がない秀二だったが、早乙女の優しさにいつの間にか恋心を抱いていた。

点滴から栄養剤に変わって5日目……

少しだけだが、消化の良い食事がようやく食べれるようになった。

約4ヶ月ぶりのご飯だ。

「うまい！お粥がこんなにうまいなんて」

4ヶ月間口にしたのは飴やガム、飲み物と栄養剤くらいだ。

だからまずい病院食もうまく感じるのだろう。

彼の退院も間近だ。

そして栄養士から今後どのような食事を食べたらよいかを聞かされた。

「肉より魚のほうがいいですね」
「栄養士さんよ。魚も肉じゃん。魚肉って言うし」
調理師の免許を仮にも持っているくせに秀二はサボっていたため、一般の常識すら分からなかった。
さらに説明が続く。
「ファーストフードは良くないです」
「ファーストフード？なんだろう最初の飯……あっ、朝食のことか！」
とことん世間知らずな男だ。
頭の悪い秀二にいろんなことを説明していたため、予定以上の時間がかかってしまった。
「やっと終わった。早い話が栄養剤を中心に消化のいい飯を食えという事だろう。しかし魚も肉だよな」
そういいながら病室へ戻っていった。

そして主治医から退院の日を言い渡された。
「今日が月曜だから、明後日の水曜くらいに退院というのはどうかね」
「あっ、いいですよ。親にもそう伝えときます」
「じゃ、そう婦長さんに伝えておくから」
担当医が去って、しばらくすると看護師の早乙女が入室してきた。
「水曜日退院だってね。おめでとう」
「ありがとう。退院は嬉しいが、でもなんか寂しい感じもする」
「長いこと病院（ここ）に居たからね。でもすぐもとの生活に戻れるわよ」
「うん……、そ、そうだ！早乙女さんに言いたいことがあったんだ」

彼は早乙女に、自分の気持ちを伝えようとした。
だがその時、別の部屋からナースコールがなってしまった。
「ごめん。後でまた来るわ」
「はい」
彼は今まで告白などしたことがない。
頭の中でどう告白しようか考え始めた。
だが結局考えがまとまらないまま、早乙女が戻ってきてしまった。

「私に伝えたい事って何？」
「えっ？あっ、ぼ、僕好きな人がいるんだけど」
「えっ！そうなの頑張れ応援するわよ」
「あ、ありがとう……でもどう告白したらいいか分からないんですよ」
「そうね～好きなら自分の気持ちを伝えるだけでいいんじゃないかな」
「はあ」
「頑張ってね」
「は、はい」

彼女が立ち去ろうとした時、
「早乙女さん、好きです」
と言ってしまった。
早乙女は立ち止まり、振り返ってこう答えた。
「こ、告白の練習かな……今の」
秀二は彼女の顔を見つめて真顔で答えた。
「練習じゃない本気です」
「……ごめんね。秀二くん。私、婚約者がいるの」
「えっ！？」
「すごく嬉しかったよ。でもごめんなさい」
「そうですか……」

「秀二くん、あなたならいい女性(ひと)が見付るわ」
「ふられる事もまたいい経験かな……今までありがとう。あとお幸せになってください」
「うん……」
「喫煙所に行ってきますわ」
その時だった。
早乙女が秀二にキスをしたのだ。
彼女の柔らかい唇が秀二の唇と重ねあう。
「キスしちゃったね」
「さ、早乙女さん」
「退院のお祝い……でも誰にも内緒だからね」
「はい、ふられたけど、初めてのキスの相手が、はじめて好きになった人だなんて、嬉しいです。これで思い残す事はないです。僕も新たな恋を探します。だから早乙女さんもお幸せになってください」
「うん」

そして水曜日に彼は退院した。
だが、クローン病との闘いは終わったのではなく始まったばかりだということをこの後秀二は嫌というほど知る事になる。

第3章　運命の出会い

退院後、すぐに彼は「生きる目標」を見つけた。
弟が空手を学び始めたため、彼も空手の道場に入門したのだ。
さらに師匠である館長が音楽をやっていたため、他の兄弟弟子と共に館長に楽器を教えてもらうことになった。
格闘技と音楽、彼には十分すぎるほどの「生きる目標」だ。

だが、クローン病は完治したわけではない。
栄養剤を中心に生活をしていても、再発をしてしまい入退院を繰り返し、そのためにバイトも転々とする事になる。
さらに二度目のオペまで行なった。

発病してから3年経ったころには、髪を金髪に染め、ストレス発散のためにギャンブルにはまり、やめていた酒にも手を出すようになっていく。

完全に「生きる目標」を忘れた秀二だった。

さらに3年後……

秀二は兄弟子に呼ばれた。
兄弟子の名は神威北斗といい、年齢は２９歳で木材工場に勤務している。
容姿はホストのようなイケメンで、なんとあの早乙女の婚約者だった男だ。
神威と早乙女は秀二が入門して半年後に無事結婚。
秀二は弟や館長、他の弟子たちと共に式に出席している。
もちろんキスの事は秀二と早乙女の二人だけの秘密のままだ。

喫茶ムーン……
この店の前で二人は待ち合わせの約束をしていた。

「秀二ここだ」
「あっ、押忍！北斗さん！今日は何の用ですか？」
「まあ、中に入れ」
「押忍！」

カランカラン

中に入ると、ヒゲを生やしたマスターとロングヘアーに少し茶色く染めて、優しい目をした可愛いウェイトレス、そして男性のお客が2名いた。
「いらっしゃいませ」
「この店は俺のなじみの店だ」
「はあ～」
「あれ？マスターこんなかわいい子、いつ雇ったの？」
「ああ、そいつは俺の姪だ。カミさんが腰悪くしてよ～それで学校が休みの間手伝いに来てもらったんだ」
「へ～」
「如月真奈です」
「あっ、どうも、北斗といいます」
「あっ、自分は河村秀二です」
「ご注文は？」
「ああ、アメリカン」
「僕はレモンティー」
「かしこまりました。アメリカンとレモンティーです」
「おい、可愛いな」
「えっ？北斗さんには奥さんがいるじゃないですか」

「でもお前あの子事気に入っただろう」
「な、なんですか！急に……」
「お前さあ、そんなんじゃ女出来ね～ぞ」
「彼女いない暦２４年でいいんですよ。生涯童貞貫きます」
「お前な～まだ若いくせに、なんならソープでもおごってやろうか？」
「い、いいですよ。もしかして奥さんに内緒でそんなとこ行ってませんよね」
「当たり前だ。俺はカミさん一筋だから」
「ならいいですけど」
「お前、キスくらいはあるのか？」
その言葉を聞いたとき秀二はドキッとした。
「ま、まあ、キスは昔……そ、そんなことより用事って何です」
「お待たせしました」
「ありがとう。学生って事は２１くらい？」
「２４です。看護学校に行っていまして」
「へ～、じゃあ、将来看護婦になるのかい。うちのカミさんと同じだな」
「そうなんですか」
「まあ、大変らしいけど頑張ってね」
「はい」
「２４……俺とタメか……しかも看護婦さんになるのか……」
「ああ？どうした？」
「いや、何でもないです」
「ああ、そうそう用事っていうのは、今度俺のダチが運転代行やるらしくって、お前、前のバイトやめただろう。だからやらないかな～と思って」
「ああ、やります。金なくて困っているんで」
「どうせギャンブルで消えるだろう」
「……」

「まあ、俺も若いころは馬鹿やってきた。だから心配なんだよ。お前を支えてくれるいい人を見つけろ」
二人が会話をしていた時に、ピー、ピーと北斗の携帯が鳴った。
「はい」
「いい人か……」
そう言って真奈のほうを見つめる秀二。
「うん、じゃあ今行く」
ピッ！
「悪い用事ができた。代行運転の事は伝えとく」
「あ、はい」
「金ここに置いとく釣りはやる。じゃあな」
「ありがとうございます」
北斗が店を出た後、秀二は彼女と何とか会話をしようと考えていた。
秀二にとって二度目の恋だ。
「す、すいません。紅茶のお代わりお願いします」
「はい」
「確かに可愛い」
その時だった。
彼女が急に強烈な痛みに襲われたのだ。
「ま、真奈！おい、大丈夫か？」
「真奈さん？」
「待っていろ。今救急車呼ぶから」
「く、薬を……」
「薬？カバンの中か？今もって来るから」
「（彼女も何かの病気と戦っているのか？）」
「持ってきたぞ。どれだ」
「（あの赤い薬は……まさか彼女も）」
「この粉薬か？」
「ち、違うわ」
「マスター、痛み止めはこれだよ」

「え？こ、これでいいのか？」
「う、うん……2錠」
彼女が痛み止めを飲んで間もなくしたら、救急車の到着した。
「救急車が来ました」
「ああ、店閉めなきゃ」
マスターはかなり焦っていた。
そんな姿を見ていた秀二は思い切ってこう言った。
「マスター、僕が変わりに付き添います」
「えっ？そうか。ワシも後から行くから頼むよ」
「掛かりつけの病院はありますか？」
「ま、真里洲大学病院……」
「（僕と同じ病院じゃないか）」
「では行きますので、付き添いの方乗ってください」
「あっ、はい」
真奈と秀二を乗せ、そして病院へと向かった。

真里洲大学病院緊急外来……

秀二は待合室でイスに座りこんでいた。

そして20分後……
真奈の伯父が到着した。

「看護婦さん真奈はどうなんですか？」
「今点滴を打って休んでいます」

さらに2時間が経過した。
そしてようやく真奈が治療室から出てきた。

「真奈大丈夫か？」

「とりあえず大丈夫。明日かかってほしいと言われたけど」
「そうか。叔父さん、父さんに電話しとくから……あっ、この兄ちゃんにも礼を言っとけよ」
「うん」
「大丈夫ですか？」
「はい、付き添いありがとうございます。薬に詳しいのですね」
「え？」
「だって痛み止め2種類あったのに、私のほしい薬をすぐに持ってきてくださったから」
「ロキソニンとソセゴン、あの場合強いほうを必要だと思ってソセゴンを渡しただけです」
「薬剤師の方ですか？」
「こんな金髪に染めた薬剤師はいませんよ」
「じゃあ？」
「赤い薬を見て、あなたがどんな病気か大体分かりました。ペンタサと呼ばれる炎症を抑える薬、まあ、リュウマチか、潰瘍性大腸炎……でなければクローン病ってとこですかね」
「まさか、あなたも」
「そう、クローン病患者です」

同じ病気を抱えた女性と出会ったが、この後、悲劇が待っているとはこのときの秀二には考えもしなかったことだろう。

第４章　真奈の入院

真奈が緊急外来に運ばれた次の日
真奈は外来にかかった。
秀二も彼女の役に立ちたいという事から付いていくことにした。
二人は待合室で順番を待っていた。

「ごめんなさいね。付きあわせっちゃって」
「いや～、暇だし自分から付いていくと言ったんだから」
少し照れながら彼は答えた。
「あっ、真奈さんはクローン暦何年ですか？僕は６年なんですが」
「私は中学２年だから、もう１０年くらいになるわ。６年前に一回だけオペをしてそれからは入院していないわ」
「へ～、僕なんか６年なのに２回もすでにオペしていますよ。しかもまた腸が細くなっているし」
「そうなんだ。でもこの病気したから、看護婦になろうと思って、去年から看護学校に通う事になったの」
「すごいな～、僕とはえらい違いだ」

二人で話をしているうちに、彼女の番が来て呼ばれた。
「如月さん」
「あっ、はい」
彼女は診察室へと入っていった。
秀二は待っている間、真奈のことばかり考えていた。

そして２０分後……

彼女は暗い顔をして出てきた。

「どうでした？」
「腸にガスがすごく溜まっているから、明日にでも入院したほうがいいって」
「入院ですか……まあ、早く入院したほうが早く退院出来ますよ」
「そ、そうね」
彼女は微笑みながら答えたが、やはり落ち込んでいるようだ。

次の日の朝……

彼女は母親に付き添われて、病院へやってきた。
そして看護師から４人部屋へ案内された。
４人部屋といっても今は彼女だけだった。

しばらくしたら担当の看護師が挨拶に来た。
担当の看護師は早乙女だ。
といっても彼女は北斗の妻になったため、神威という姓に代わっている。
真奈が入院していた時には早乙女はいなかった。
そのためお互いはじめてだった。

時間は流れて、時計の針は昼の１２時を差していた。
そして昼過ぎには秀二もやってきた。

「こんにちは……あれ？もしかしてお母さん？」
「そうよ。お母さん、この人が昨日言った河村秀二くん」
「どうも秀二です」
「この前はありがとうね」
「あっ、はあ～……」
彼は頭をかき照れ笑いした。
「担当の看護婦さん、早乙女さんか」

「早乙女？神威さんよ」
「あっ、旧姓は早乙女で、僕の兄弟子、ほらこの前の人、あの人と結婚して苗字が変わったんですが、僕は未だに早乙女さんと言ってしまうんですよ」

その時、ちょうど早乙女が部屋に入ってきた。

「あら、秀二くん」
「どうも」
「知り合いだったの？」
「最近ね」
「そう……あっ、如月さん、これ明日の検査の予定表」
「ありがとうございます」
「じゃあ、何かあったらナースコールで呼んでくださいね」
「はい」
「明日は胃カメラですか」
「そうみたい」
「まったく検査も嫌ですよね～。レントゲンみたいに楽だといいのに」
「そうね」

この検査で彼女に悲劇の真実が待っていることをまだ誰も知らない。

第5章　悪意と悲劇

真奈は一通りの検査を終え、2週間が経過した。
検査の結果、小腸と大腸の付け根がひどく狭窄していた。
さらに胃カメラで悪性腫瘍が見付った。
このことは真奈と秀二は知らず、知っているのは看護師と医者、親と伯父と北斗だけだった。

喫茶ムーン

カラン
店に入ってきたのは秀二だ。

「いらっしゃい」
「マスターいつものアイスレモンティ」
「はい」
「ママさんも真奈さんもいないから一人で大変ですよね」
「ああ……まあ、今はアンタだけだからいいが、さっきは忙しかった」
秀二はマスターに負担をかけないように、水とお絞りは自分で用意した。

「お待ち同様」
そう言ってマスターは秀二の前に座った。
「アンタには言っといたほうがいいかな……」
「何を？」
「真奈の容態」
「聞きましたよ。狭窄がひどいって」
「それだけじゃないんだ」

「えっ？」
「胃カメラの検査で悪性の腫瘍が見付った。しかも他にも転移している」
それを聞いた秀二は言葉を失った。
「医者の話では長くて半年だそうだ」
「う、うそだ……」
「このことはアイツは知らない」
「そ、そんな……」
「秀二くん、最後までアイツと一緒にいてくれないか？」
「も、もちろんです……」
さすがにショックだったのだろう。
彼は悲しみを胸に仕舞い、真奈の見舞いに出かけた。
真里洲大学病院内科……
部屋に入る前に秀二は大きく深呼吸をし、入室した。
「どう？調子は？」
「うん、入院してからは激しい痛みはなくなったわ」
「そうか。まあ、俺も狭窄がひどいから同じだよ」
「そうね」
真奈が微笑んだ。
それはまるで天使の笑顔のようだ。
「あっ、そうそう、ついに出来たんだ」
「ホント！」
「ああ」
彼は亡くなった友たちのために「祈り」という曲を作詞、作曲し、
それをＣＤ－Ｒに収録したのだ。
「最近は自殺や他殺などが増えてきたからね～」

「ホントね」
「生きたくても生きられないものがいる。俺はそれを伝えたいがために、このデモＣＤを患者に無料で配ろうと思っている。まあ、健康人には２００円くらいで売るつもり」
「そうなんだ」
「ビンボーだから俺……」
「ねえ聴かせて」
「あ、ああ」
彼女のラジカセにＣＤを入れ、秀二の作った曲が部屋中に流れた。
彼女は静かに曲を聴き、その顔を秀二は優しく見つめた。
そして曲が終わり彼女は笑顔で答えた。
「いいと思うわ。これを聞けば命の大切さが伝わるわよ」
「あ、ああ……」
真実を知った秀二にはこの曲はもはや真奈のためのレクイエムだと思ってしまった。
「俺、タバコ吸ってくるわ」
「あっ、今日から喫煙所は外になったわよ」
「知ってる。いずれ病院でタバコが吸えなくなる日が来るだろう」
「いい機会だから、止めたら？タバコなんて体によくないんだから」
「う、う～ん……そ、そうだね……よし！止めよう！」
「それがいいわ」
「あっ、ジュース買に売店に行って来るけど、何かほしい物ある？」
「特にないけど、そのまま喫煙所に行くつもりでしょ？」
「ま、まさか～」
そう言って秀二は部屋を出た。
そして少し歩いたところで立ち止まり、ポケットからタバコを取り出した。
「やっぱ、約束は守らないとなあ～」
本当は売店に行ったあと、喫煙所に行くつもりだったようだ。
秀二は、真奈の部屋に戻り、

「持っていると吸いたくなるから、これ伯父さんにでもあげてよ」
と、真奈にタバコを渡した。
「（秀二くん……）うん、分かったわ。その代わり頑張って禁煙してよ」
「ああ！」

再び彼は部屋を出て、売店に向かう途中、真奈の入院中の担当医と出会った。
この医者には秀二も入院中にお世話になった医者だ。

「先生、どうして真奈ちゃんが」
険しい顔で秀二は質問した。
「何でクローン病も悪性の癌も治せないんだ」
「河村くん、たとえ1パーセントしか可能性がなくても、我々は最後まで彼女を全力でみる。だから」
「……クソ！」
医者に悪意はない。
そのため怒りと悲しみにやりきれない思いの秀二だった。

第６章　生きる目標

秀二が売店から真奈の病室へ戻ると、真奈と早乙女が秀二の作った「祈り」のＣＤを聴いていた。

「秀二くん、この曲いい曲じゃない。一枚買うわ。いくら？」
「早乙女さんからはもらえませんよ。北斗さんからなら貰うけど」
「この曲、今すごく落ち込んでいる子に聴かせたいの」
「へ～、男？女？病名は？」
「病名までは言えないけど内気くんという男の子よ。隣の病室にいるわ」
「どれ、挨拶に行ってこようかな」
秀二は「祈り」のＣＤを持って、一人隣の病室に行った。

だが、部屋には５０代くらいの男性と８０代くらいの男性しかいなかった。
秀二はその辺を歩き回り、非常階段の近くでイスに座りこの世の終わりみたいな顔をした青年を見つけた。

「あっ、スイマセンがね。あなた７０５室の内気さんじゃないですか？」
青年は一瞬驚き、「はい」と答えた。

「僕は、河村秀二。今は入院していないが病院（ここ）とは長い付き合いで、早乙女さんから君の事を紹介された」
「そうですか」
「あ～、なんか悩みでもあるんじゃない？」
その言葉に内気はため息を吐いた。
「ま、まあ、入院していると退屈だよね」

何とか励まそうとする秀二。
「あっ、年はいくつ？俺は２４だけど」
「２１です」
と力のない声で答えた。
「もしかしてクローン病？」
「潰瘍性大腸炎」
とまた力のない声で答えた。
これでは会話が続かないと思う秀二だった。
「潰瘍性か～まあ、大変だけど元気だしなよ」
「スイマセンが、一人にしてもらえます」
「えっ！あっ、はいはい……じゃあまた」
そう言って立ち去ろうとした。
「あっ、そうだ。このＣＤよかったら聴いて、僕が作ったんだ。亡くなった友たちのために」
ＣＤを置いて秀二は立ち去った。

その後秀二は夕方過ぎまで彼女の近くにいた。

それから3日後の昼過ぎ……

真奈の部屋には母親が来ていた。

「今日は」
「いつも悪いね」
「いや～」
「じゃあ、母さん帰るけど、またほしいものがある時は電話して」
「うん」
「後はお願いね」
「はい」
彼女の母は気を使い自宅へ帰っていった。

「いや～、真奈ちゃん、ここ3日間俺も調子悪くてこれなかったよ」
「大丈夫？」
「ああ、昨日の夜は代行運転のバイトもしてきたし、大丈夫だよ」
3日ぶりの二人だけの時間だ。
そして2時間くらいの時が過ぎた。
「ジュース買に行くけど、何かほしい物はない？」
「じゃあ、飴をお願いしようかな」
彼女はクローン病患者でもある。
そのため絶食中に口に出きる物といえば、ジュースか飴、ガムくらいだ。

部屋を出て売店へ行く途中、また非常階段の近くで内気が座っていた。
しかも彼は泣いていた。

「どうした？」
「もう嫌だ」
「何が嫌なんだ？」
「生きていくことにさ」
「じゃあ、死ねよ」
険しい顔で彼はそういった。
「うっ……」
「世の中には生きたくても生きられない人がいるんだ。俺は入院中にそのことを思い知らされた。だから、あのCDを作って命の大切さを伝えようと思ったんだ」
内気はゆっくりと秀二のほうを見た。
「えっと……かわ……あっ」
「河村秀二だ」
「河村さん、僕怖いんだ。この病気になったばかりだし」
「分かるよ。その気持ち。俺だって常に痛みと恐怖との戦いだ。だ

が、それでも生きたいと思っている。あんたには生きる目標みたいなのがないのか？」
「生きる目標……」
「俺は格闘技や音楽、それに今は恋をしている。あんたの隣の部屋の女の子にね。アンタも何か見つければ、人生楽しくなるはずだ」
「は、はあ……そ、そうですね」
「まあ、チンピラの俺があまり偉そうなこと言えないんだが、ただ、アンタにも生きる目標を持ってほしい」
「ありがとうございます」
「病気は違うがお互い頑張ろう」
「はい」
その返事には今までなかった力強い返事だった。
病人が病人を励ましあう事で、お互いの励みになっていく。
いつかは内気も誰かを励ます男になっていく事だろうと秀二は思った。

第7章　真実

真奈が入院してから2ヶ月が過ぎようとしていた。
そして彼女の担当医は真奈の外出許可を出した。
残り少ない人生、彼女に心残りのないように1日1日過してほしいと誰もが思ったからだ。

朝１０時……
秀二が病室に来たころ、看護師の早乙女がヘパリンと呼ばれる薬で、点滴をしていなくても血液が逆流しないように管をロックしていた。

「久々に自由になれるわ」
「今日は一日中俺は付き合うよ」
「じゃあ、如月さん消灯前には戻ってきてね」
「はい」
「秀二くん後はよろしくね」
「任せなさい」
秀二もデートが出来るということでご機嫌だ。

そして秀二の安い軽自動車で二人は出かけた。
まず1時間くらいドライブをし、その後カラオケに行き、そしてゲームセンターへ行った。

だが楽しい時間は早く過ぎてしまうものだ。
気がつけば夕方の5時を回っていた。

「次はどこ行こうか？」
と言って、彼女のほうを見ると、さっきまで笑顔だったのが今は悲しい顔をしていた。

「どうかしたの？痛いの？」
「ううん、違うの」
「じゃ、じゃあ、どうしたの？まだ時間はあるよ」
すると彼女は秀二のほうを見てこう言った。
「抱いてください」
「えっ？」
秀二は驚いた。
「車の中でもどこでもいいんです」
彼女は本気だった。
「ま、真奈ちゃん、それは別に今日じゃなくても」
「私には時間がないんです」
「えっ？時間がないって、確かにもうすぐ病院に戻らねばいかんが、まだ大丈夫だよ」
「そうじゃないんです」
「じゃ、じゃあ何の時間がないの？」
「知っているんでしょう。私の命が後どれだけか」
「な、何を」
「ごまかしてもダメです」
「……」
「死ぬのは怖い……でも、だからこそ真実を知りたいんです」
秀二はこぶしを強く握り締めた。
自分にはどうする事もできない彼女の悲しい真実に自分自身が許せないのであろう。
しばらく秀二は黙り込んだ。
何を言えばいいのか分からないのだ。
そして、彼は彼女にこう言った。
「真奈ちゃん、例えどんことがあっても、自殺なんかしないでよ。最後まで病気と闘ってほしい……奇跡なんて俺は病気してから信じなくなったが、でも今は奇跡が起きると信じたい。だから……」
「ありがとう秀二くん」

「……」
「それで、抱いてくださるんですか？」
「……一つ聴いていいかい」
「はい」
「やけでそんなことを言っているのなら、悪いが僕は断る。僕はチンピラで遊び人だが女性の経験はないんで……だから、その……初めての人とはお互いちゃんとした気分で」
「秀二さんは私のことが嫌いですか？」
「……い、今なら言える。僕は真奈ちゃんが好きです。君が彼女だったらな～といつも思う。でも……」
「私も同じよ。秀二さん自分ではチンピラだとか言っているけど、でもすごく優しい人だと思うの」
「はあ～」
「もし今日の相手が秀二さんじゃなければ抱いてなんて言わない。私もあなたが好きだから言ったんです」
秀二は頭をかき、大きく息をはいた。
「分かった」

二人はそのまま近くのホテルへ向かった。
そして車の中で真奈は秀二にこう言った。
「実は私も初めてなの」
「ホント？モテそうなのに」
「確かにモテたわ」
そういったときの彼女はさっきまで悲しい顔をした彼女ではなく、いつもの優しい笑顔の彼女だった。
「秀二くんだってモテたでしょう」
「全然、アニメにときめく人間なんで、今まで付き合ったことないのよ僕」
「ホント？」
「本当」

「もてそうなのに」
「いいんですよ。もてなくても……い、今は君がいるから」
その言葉に彼女はクスッと笑った。
「私ね今まで、人に肌を見せるのが嫌だったの」
「嫌いな男性だったから？」
「違うわ。中には好きな人もいたわ。でも私お腹に手術の跡があるでしょう。それを見られるのが嫌だったの。でも秀二くんは同じように跡があるから平気かな」
「僕は男の勲章だと思っているけどね」
「男性と女性とじゃあ違うの」
「そうですね」

そしてこの日、二人は始めて体と心が一つとなった。
心と体に消えぬ傷を持った者同士が、本気で愛し始めたのだ。

第8章　ありがとう

真奈と秀二が正式に付き合い始め、さらに抗がん剤治療で彼女の様態は良くなっていったのだが、それはつかの間の安息であった。
「神のみぞ知る」彼女の運命……
時は無情にも流れいく。

真奈が入院してから5ヶ月が過ぎ、新たな年を迎えた。

「さむ～」
と言って、秀二が入室してきた。
「どう、真奈ちゃん、調子のほうは？」
「う、うん、まあまあかな」
「そうか。良かった」
だが、真奈の顔には笑顔がなかった。
「どうしたの？」
「これが最後の正月……」
そう彼女は小声で呟いた。
「な、何を言っているんだい。真奈ちゃんの容態は良くなってきているじゃん」
その言葉に彼女は微笑んだ。
悲しみを胸にしまい彼女は、秀二に心配させないように微笑んだのだ。
「来月は秀二君の誕生日ね」
「ああ～、もう25だよ。もう年は取りたくないよ～」
「でも年を取るということは生きている証よ」
「そ、そうだね」
「クリスマスには何もあげれなかったから、誕生日には何かプレゼントしたいな～」

「クリスマスの時には君がいた。それが最高のプレゼントだよ。だから、誕生日にも同じように君がいてくれることが最高のプレゼントさ」
「ありがとう秀二くん」
「僕のほうこそ」
そう言って二人はキスをした。
「真奈ちゃん」
「なあに」
「俺、北斗さんのところの工場に就職するよ。そして君が元気に退院したら、その……けっ、結婚してほしい」
その言葉を聞いて真奈は涙が流れた。
もちろん嬉し泣きだ。
そして彼女は「はい」と返事を返した。
秀二は真奈が容態が良くなってきているので、医者の言う事などあてにはならない……
いや、もしかしたら奇跡というものが本当に起きるんだと心から思った。

だが奇跡は起きなかった。

2月に入ってから彼女の容態は悪化した。
医者が真奈の両親に「身内の方を呼んでください」とまで言ってきた。

「何で……俺の誕生日には、真奈ちゃん、いてくれると言ったよね。そして退院したら結婚してくれると約束したよね。なのに、何で……」
秀二は彼女の近くでそう呟いた。
だが、彼女は何も答えてはくれなかった。
すでに真奈の意識はない。

だが、彼女は今でも病気と闘っていた。
「君はこれから看護師になって多くの患者のために……早乙女さんのような看護師になるんだろう。だから生きてくれ」
その姿を早乙女が静かに見つめていた。

2月22日……
秀二の25歳の誕生日の日
朝早くから真奈の伯父からすぐ来てほしいと連絡が来た。

秀二は急いで病院に行った。
「今日でお別れなんて言わないでよ」
そう言いながら車を運転し、病院に向かった。

だが、彼が病院に着いたとき、真奈の病室からたくさんの泣き声が聞こえた。
部屋に入ると永久(とわ)の眠りについた真奈の姿が……
今にも目を覚ましそうな顔をしていた。

秀二は涙をこらえた。
「俺のようなチンピラが生きて、何で君みたいな優しい人が……」
そんな秀二に真奈の母親が泣きながら「秀二くん、ありがとうね」と言って来た。
その言葉に秀二は何も言葉が出てこなかった。
真奈は秀二の誕生日に亡くなった。
彼女は秀二の誕生日プレゼントを渡すために頑張って、秀二の誕生日まで生きたのであろう。
最後の最後まで彼女は病気と戦い、そして華のように散って逝った。
まだ24歳という若さで空に羽ばたいてしまった。

第8章　ありがとう（後書き）

河村秀二というキャラのモデルは僕なんですがね。
でも彼がうらやましいです。
それはこんな恋愛したことない！
好きだった看護師にキスしてもらった事もない！
という事です。

第9章　自暴自棄

真奈が亡くなってから半年が過ぎた。
その間に秀二は北斗が勤めている工場にアルバイトとして入社するが、調子が悪くなり半年で退社した。

その後、今度は彼が入院をするのだが、真奈を失った事により自暴自棄になっていた。

「また、自分の顔を殴ったの」
と、担当の看護師から注意を受けていた。
「別に他人を殴ったわけじゃないからいいでしょ」
「そういう問題じゃ」
「出て行ってくれないか」
「……いい、もう自分で自分を傷つけるのをやめてくださいね」
そう言って担当の看護師は出て行った。
その時だった。
同じ病室の６０代くらいの男性が秀二に注意してきた。
「おう、兄ちゃん、入院してイライラするのは分かるが、あまり看護師に迷惑かけるなよ」
「……ほっといてくれませんか」
「何！」
男性は秀二の態度に腹を立てていた。
その時だった。
その男性の担当の看護師が入室してきた。
男性の担当は早乙女だ。
「看護師さんよ」
「はい」
「悪いがあの兄ちゃんと別の部屋にしてくれないか」

「えっ？何かありましたか？」
「いやね。あいつの態度を見ていると腹が立つんだ」
その言葉に秀二はこう言った。
「アンタが出て行けよ」
「秀二くん」
「ほらね～あんなヤツと一緒の部屋だとストレスが溜まる」
「スイマセン。ホントはいい子なんですが」
「俺はどうせチンピラですよ」
「秀二くん……」
その時だった。
退院間近の内気が入室してきた。
「秀二さん、来週退院が決まりましたよ」
「内気くんおめでとう」
と、早乙女が祝いの言葉を送った。
だが、秀二はこう言った。
「あっ、そう。良かったね。まあ、がんばれや～」
そう言って彼は部屋を出た。
「秀二さん……」
「大丈夫よ。内気くん。すぐに秀二くんも元気になるわ」
「そうですよね」

秀二が向かった場所、それは喫煙所だった。
真奈と禁煙を約束してから、止めていた彼が、久々にこの場所に来たのだ。
そして、ふと、椅子を見ると、誰かが忘れたタバコが落ちていた。
秀二はそのタバコを拾い、吸おうとしたが、真奈との約束を思い出し、すぐに喫煙所を出た。
「真奈ちゃん……会いたいよ」
小声でそう呟いた時、彼の目から涙が流れた。

その時！秀二の携帯が鳴った。
相手は師匠である館長からだ。
縦社会の厳しい武道の世界
さすがに師匠である館長には丁寧な言葉使いで会話をしていた。
「押忍！今日の夕方お見えになられるのですね。ありがとうございます」

夕方……

館長が見舞いに来られたので、秀二はロビーに案内した。
館長は弟子思いだ。
内弟子ならともかく、外弟子の秀二に、しかも付き人も付けず、一人で来られたのだ。
「押忍！館長！お忙しい中ありがとうございます」
「おう、で、調子はどうだ」
「あまり良くないです」

秀二が通っている実戦空手新戦会は館長の後藤勇５段
その下に内弟子であり四天王と呼ばれる方たちがいる。
師範の土方俊夫３段
指導員の沖田一２段
同じく指導員の永倉新一２段
同じく指導員の原田光介２段
そして神威北斗初段
以上が黒帯で、弟の秀三は茶帯だ。
秀二はあまり練習に出れないため、まだ色帯であった。

「おっ、もう１９時か……」
そう言って館長は帰宅した。
秀二は館長が見えなくなるまでお辞儀をした。

その後病室に戻ると夜勤の看護師からこう言われた。
「明日、河村さんは、隣の病室へと部屋を変わってもらいます」
「はあ？何で俺が、出て行くならあのオッサンのほうだろう」
「もう決まったことです」
そう言って看護師は退室した。
「クソジジイ！」
「若いな。こんなことで切れるなんて、お前さんはまだ人として未熟だな」
「なんだと！」
その時だった。
今日の勤務を終え、帰宅しようとしていた早乙女が入室してきた。
「秀二くん、いい加減にしなさい」
「……」
「病院で問題を起こせばどうなるか分かるでしょう」
「クッ……」
「今は自分の体のことをまず考えなさい」

普段優しい早乙女が、ついに秀二に対して本気で怒ったのだ。
それに対して秀二はこんなことを言った。
「俺、退院します」
「えっ？」
「どうせ病院（ここ）にいても治らん病気じゃ」
その言葉に早乙女は険しい顔をし、その後は何も言わずに部屋を出て行った。
早乙女にも分かっている。
彼の今の精神状態が不安定だという事を……
そのために一時退院させたほうがいいのではと彼女は思った。

次に日、秀二は隣の病室へと移動した。

そして夕方……
彼の担当医が入室してきた。

「まあ、看護師からいろいろ聞いている」
「……」
「確かに今の君の不安定な精神状態じゃ長期入院は無理です」
「はあ」
「明後日にでも、一度退院するかね？」
秀二は悩んだが、自分自身でも長期入院は無理だと分かっていた。
「じゃあ、退院します」
「じゃあ、師長に伝えとくから」
「はい」

真奈を失った事により、「生きる希望」をなくした秀二。
この先彼は立ち直る事ができるのか？

第9章　自暴自棄（後書き）

新撰組が好きなんですが、今やっている大河ドラマ「龍馬伝」を見ていたら、坂本龍馬に興味を持ち始めました！
福山さんの龍馬カッコいいぜよ＞＜
あと土方役には「風林火山」で上杉謙信を演じた神威楽斗さんに演じてもらいたかった……

第１０章　一冊の闘病記

急遽退院となった秀二
だが、彼は良くなって退院したわけではない。
毎日、痛みとの戦い
結局彼は半年後に痛みに耐え切れず、３度目のオペをした。

退院後、クローン病自体は良くなったが、相変わらず精神的に不安定だった。
精神科にも通うが、薬物依存性にまでなってしまった。

手は震え、ろれつも回らない状態だった。
また、ラリッて訳の分からない事を言い始めた。
さすがに親は心配になり、内科の担当医と相談し、精神科に通うのは中止となった。
だが、今まで大量に強い安定剤などを飲んでいたのにいきなり中止してしまったため、彼はさらに不安定になっていった。
仕事もせず、道場にも行かず、完全に引きこもりとなってしまった。

母親も心配して、様子を見に来るが、相変わらず無気力であった。

そんなある日、兄弟子の北斗が秀二の家に訪問してきた。

ピンポーン
とブザーを鳴らすが秀二は出てこなかった。

「秀二、いるんだろう」
だが、返事はなかった。
１０分くらい北斗は待ったが出てきそうもないので帰ろうとした時、

ようやく秀二は玄関を開けて姿を見せた。

「なんですか？」

「なんですかじゃない！中に入るぞ」

そう言って北斗は中に入っていった。

「館長や他の皆が心配しているぞ。弟の秀三もうちのカミさんも皆がお前のことを心配しているんだ」

「はあ」

「こんな姿を真奈ちゃんが見たらどう思う」

「もう真奈はいないじゃないですか」

その言葉に北斗は腹を立てた。

「俺よう。お前のことを凄いと思っていたんだぞ。病気と戦い、さらに命の大切さを伝えようとＣＤまで作って、頑張っているんだな～て思っていた」

「……」

「だが、今のお前はなんだ」

「自分自身でもどう生きていいか分からんのです」

「誰だって世の中が嫌になることはある。俺だって仕事で嫌な事があると、どうでもいいなんて思ってしまう。でもそれを支えてくれる家族や仲間がいる。お前もそうだろう」

「はあ」

「秀三はな、今の兄を見ているのが辛いといっていた。お前、弟に心配掛けてどうするんだ」

「はあ」

「まあ、他人の家庭のことをあまり言いたくないが、お前のお袋さん、離婚後もお前の面倒を見てくれたんだろう」

「はい」

「秀三だって、兄を励ましに行っていますと言っていたぞ」

秀二が中学の時に親は離婚し、父親が兄と秀二を、母親が秀三を引

き取ったため、秀三とは離れて暮らしていた。
その後、兄秀一は保育士になり、瑠奈という女性と職場結婚し、現在は一男一女の父親だ。
秀二にとっては甥と姪で、甥の名は龍一、姪は麗羅という。
また、そんな秀一に憧れて弟の秀三も保育士になろうと勉強中であった。

「とにかく皆、お前のことを心配しているんだよ。んで、うちのカミさんからお前にプレゼントだ」
そう言って渡されたのは一冊の闘病記であった。

「俺もこれを読んだが、感動した。お前もこれを読んで、また命の大切さを思い出してほしい」
「はあ～」
「まあ、いいたい事はそれだけだ。今度は道場で会おう」
そう言って北斗は帰っていった。

だが秀二は渡された闘病記を読もうとはしなかった。
その本の内容は、１７歳の少年が癌と診断され「生きる目標」のために東大、早稲田といった入学するのが困難な大学にあえて挑戦し、見事合格した。
だが、入学して間もなく彼はこの世を去ったという内容だ。
秀二も内容くらいは知っていた。
だが、この本を書いたのはその少年の母親だ。
彼は心の中で自分の子供を金儲けの道具にしたんだ。
そう思ったため、読む気にはなれなかったのだ。

そして秀二は何日も生きているのか死んでいるのかわからん状態でいた。

だがある日、今まで読もうとしなかった闘病記に彼は興味を持ち始め、いつの間にかその本を読み始めた。
そして読み終えて、この本を書いた母親がどんな気持ちで書いたのかが分かった。

「俺はなんて情けないんだ。そういえばガキのころから最強の武道家になるのが夢だとか言っていたが、精神的にまず弱いんだよ」

だが、このときに出会った一冊の本が、彼に新たな「生きる目標」を見つけることとなる。

第１０章　一冊の闘病記（後書き）

「少しは恩返しができたかな」という闘病記。
この本をぜひ読んでみてください。
僕は今でも落ち込むと読んでいます。

第１１章　兄弟対決

一冊の闘病記を読んでから、秀二に生きる気力が出てきた。

「俺も自伝を書こうかな……でも、たいした生き方していないし……」

彼は悩み始めた。

真奈を失い、生きる気力を失っていた彼が、新たに「生きる目標」を見つけようとしていたのだ。

「そうじゃ！俺は今まで病人には格闘技は無理だと思い始めていたが、現実で無理なら物語の中で格闘技をやり続けよう」

そんなある日、彼は道着に着がえて、久々に道場に行くことにした。

新戦会空手道場

「久々だと緊張するな～しかも、もう練習始まっているし」

そう言いながら道場の中へ入っていた。

「押忍！」

「ん！秀二！」

「館長、スイマセンでした。今まで何の連絡もしないで」

「もう体調のほうはいいのか？」

「押忍！まあまあです。それで館長、稽古の後にお話が」

「大事な話か？」

「押忍！」

「土方と北斗ちょっと来い」

「押忍！」

「あと、内気お前も来い」

「お、押忍！」
「あれ、どこかで見たと思ったら」
「お久しぶりです。秀二さん」
なんと秀二が道場に来ない間に、あの潰瘍性大腸炎という難病患者内気が入門していた。
その姿はたくましく、出会ったころの軟弱さはなかった。
「神威さん……北斗さんの奥さんに秀二さんがここに通っていると聞いて、それで入門しました」
「そうか！俺よりたくましくなって」
「内気もういいぞ。練習に戻れ」
「押忍」
そして秀二と館長と土方と北斗は道場の外に出た。
「で、話というのはなんだ？」
「じ、実は今日限りで会を脱退……」
その言葉に館長の顔が険しくなった。
「最後まではっきり言え」
「押忍！今日限りで会を脱退し、空手を辞めるつもりです」
「本気か？」
「押忍！」
「理由は？」
「押忍！自分は館長や兄弟子たちのような武道家を目指していました。でも病人には格闘技は無理だと気づかされました」
腕を組み秀二のほうを鋭い眼光で睨めつける館長。
「内気は頑張っているぞ！」
「あっ……じ、自分は自分なりに格闘技を続けるつもりです」
「どうやって」
「え～、小説を書いて、物語の中で格闘技をやり続けようと思っています。本当なら勝ってに練習を休んでいたから、とっくに破門されていてもおかしくないのに、病気という事で許してもらっていました。本当に館長や兄弟子たちには言葉では返せないくらい感謝し

ています。でも……えっと……だからこそ、けじめをつけようと思いまして、えっと……」
「もういい、分かった。空手を辞めることは許可する。だが、お前はこれからも新戦会の人間だ」
その言葉に秀二の目から涙が流れた。
「馬鹿やろう！泣くやつがあるか」
「お、押忍……」
「本当は今月中に何の連絡もしないなら、破門するつもりだった。なあトシ」
「押忍！」
「お前はお前のやり方で格闘技を続けろ」
「押忍！ありがとうございます」

その後４人は道場の中へ戻っていった。

「練習やめい！」
「押忍！」
「実はな今日限りで秀二は空手をやめることになった。だが、会自体には秀二の名は残しておく。秀二、皆に一言言え」
「押忍！自分はこの道場で強さとは何かというのを知りました。そして、自分にはこんなに仲間想いで、心強い兄弟弟子と出会い、苦楽を共にしたことを誇りに思い、生涯の宝にしたいと思います。練習にはこれから出てきませんが、会の行事には参加します。これからもよろしくお願いします。新戦会河村秀二」
このとき彼は空手道新戦会河村秀二と言わず、新戦会河村秀二といったのは、すでに空手を辞めたから、あえて空手道は言わなかったのであろう。

「よし。これより秀二の最後の組み手を行なう」
「押忍！」

「組み手の相手は黒帯全員」
「えっ！お、押忍……」
「といいたいところだが、病人という事もあり、相手は河村秀三」
「押忍！」
他の練習生は壁際のほうへ行き、正座した。

秀二の相手は弟の秀三だ。
だが、すでに秀三は初段を取得している。
それに対して秀二はここしばらく稽古をしていない。

「正面に礼！お互いに礼！始め！」

先に攻撃を仕掛けたのは秀二だ。
右の下段蹴り、さらに前蹴りをする。
だが、秀三にはまったく効いていない。
「秀三！お前も攻撃せんかい」
「押忍！」
今度は秀三の右下段蹴り、そしてまた右下段蹴り
秀二も負けずに秀三の首めがけて、手刀をするが紙一重で交わされた。
そして秀三の右上段回し蹴りが秀二のコメカミを直撃。
今度は秀二は正拳突きをするが、まったく効いていない。
だが、その後に渾身の力をこめた下段蹴り、一瞬だが秀三の表情が変わった。
さらにもう一発下段蹴り。
だが、秀三のかかと落としが顔面に直撃。
秀二の鼻から血が流れ出た。

「やめい」
「押忍」

「正面に礼、お互いに礼」
これで秀二の最後の組み手が終わった。
完全に秀二の負けだ。
だが、弟が予想以上に強くなったことに秀二は喜んだ。
そして秀二の近くに内気がやってきた。
「秀二さん」
「内気君、俺は俺のやり方で格闘技を続ける。だから君は君で頑張るんだ。いいね」
「押忍」
「あっ、鼻血が……」
そして練習が終わり、道場を出たときに、秀二は涙を流しながらお辞儀をし去っていった。

第１１章　兄弟対決（後書き）

実際は家で弟と喧嘩試合をしてボコボコにされました。
その後世の中が嫌になって道場に行かなくなり、勝手にやめた人間です。

第１２章　再会

物語の中で格闘技を続けようと決心した秀二。

「主人公は女みたいな容姿だが強い。で、学んでいる格闘技は空手……いや、他にないか」

彼はそう言いながら、自宅にある漫画を含めた格闘技の本を読みあさった。

「そういえばガキの頃戸隠流の３４代目宗家、初見良昭先生の弟子になって忍術を学びたいと思っていたな～よし、主人公は忍術を学んでいるという設定にしよう」

彼はない頭を絞らせ話を考え続けた。

「主人公の少年は、戦国時代、抜け忍となった忍びが追ってから身を守るために編み出した流儀を学ぶ……いや、抜け忍はやめよう」

そう言って再び格闘技関係の本を読む秀二。

「そうだ。天正伊賀の乱で生き延びた忍びの一人が編み出したという設定にしよう。あと、師匠は女性だな」

彼は夢中で話を考えた。

しばらくして今度は闘病記を読み始める。

「早乙女さんに返さなきゃ……」

秀二は明日にでも返しに行き、そして自暴自棄になっていたときに迷惑かけたことを詫びようと思った。

次の日

秀二は病院へ向かった。

あらかじめ、彼女が勤務しているか北斗からメールで情報も得ていた。

そして病院に着き、内科のナースステーションへ向かった。

「早乙女さん」
「あっ、秀二くん。主人から聞いているわ。でもその本はあなたにあげるつもりで、主人に渡したんだけど」
「えっ、いいんですか！」
「その本のおかげで、新たな生き方を見つけたんでしょう」
「はい」
「ならあなたが持っていたほうがいいわ」
「ありがとうございます……それと真奈ちゃんが亡くなってから、迷惑をかけてスイマセンでした」
「いいのよ。そんなこと」
その時、ナースステーションの前を、秀二と揉めたあの六十代の患者が通りすぎていった。
そして秀二は、あの時の事をこの人にも詫びなければと思った。

「あっ、こんにちは」
秀二の言葉に男性患者は立ち止まった。
「なんだ。お前さんかい」
「あ、あの時はスイマセンでした」
「お、おい、なんだ急に」
「あの時の自分は、病気に、自分に負けてそれで」
その言葉を聞いて男性患者は秀二の方を叩いてこう言った。
「もうええよ。わざわざ詫びてくれたんだ。もう水に流す」
「ありがとうございます」
「まあ、あの時より元気になってよかったな～」
「はい」
「お前さん若いんだ。病気に負けず頑張れよ」
「はい」
男性患者はそのまま自分の病室に戻っていった。

「早乙女さん、あの人あれからずっと入院していたんですか？」
「一度退院されたんだけど、先月入院されたの。まあ、あまり詳しくは教えられないけど」
「はあ～」
「それより偉いわ。ちゃんと謝るなんて」
「そんな……あっ、そういえば同じ部屋でしたが、名前知らないや」
「坂本武蔵さんよ」
「宮本武蔵みたいな名前ですね。あれ？」
秀二があの患者の名を聞いて何かを思い出した。
「まさか、そんな……」
「どうかしたの？」
「少林寺の先生」
「えっ？」
「あの人は僕のもう一人の武道の師匠ですよ」
「そうなの」
「こりゃいかん。ちゃんともう一度謝ってこなくては」
そう言って秀二は坂本の病室を探した。
「あっ、ここだな。失礼します」
そう言って入室した。
「おう、どうした」
「改めて詫びに来ました先生」
「もう水に流すといっただろう……ん？先生ってなんだよ」
「お忘れなのも無理はありません。自分も今気づきました」
「はあ？」
「河村秀二です」
「河村……」
「昔、父と兄と共に先生から少林寺拳法を教えてもらっていた者です」
「おお！お前さん、あの秀二か！スイミングに通うためうちの道場

をやめた」
「はい、お久しぶりです」
「なんじゃあ。自分の元弟子だと気づいていたらもっと渇を入れたのに」
「はあ」

それから秀二は武蔵に、病気してからの事を話した。
「そうか。お前も苦労したんだな」
「はあ～」
「俺のように年取ったモンなら仕方がないが、まだ若いのにな～」
「本当にあの時はスイマセンでした」
「もういいから、お前が自分自身壊れるくらい、その女の子を愛していたんだろう」
「はい」
「それにしても、物語の中で格闘技を続けるとはいい心がけだ」
「ありがとうございます」
秀二は頭をかきながら照れ笑いした。
「しかしまだ子供だったお前が、こんなに大きくなって……いくつになった」
「もうすぐ２６です」
「２６か……俺も年を取るわけだ」
「先生、今道場は？」
「俺は隠居して今は息子の達磨（だるま）に任せてある」
「達磨君とは懐かしい」
「アイツももう３０だ」
「失礼ですが先生は何の病気なんですか？」
「知りたいか？」
「ス、スイマセン失礼な事を聞いて」
「お前さんの愛した娘さんと同じじゃ」
「えっ？」

「まあ、俺はいい年だ。後は時の流れに任せる」
「先生……」
「さて、少し休ませてくれないか」
「あっ、はい……また来ます」
「ああ、重蔵さんや秀一によろしく伝えてくれ」
「はい」

秀二が帰宅しようとしたとき、早乙女が頭を抑えて立ち止まっていた。

「早乙女さん」
「ん？もう帰るの？」
「はい。それより頭でも痛いんですか？」
「ちょっと風邪引いちゃったみたい」
「そうですか」

だが早乙女は知っていた。
自分の体がどうなっているのかを……
そして看護師から患者にならねばならないことも彼女は知っていた。

最終章　「生きる時」

２０１０年
秀二の自伝はほとんど完成間近であった。
「あと少しだ」
そう言って続きを書き始めた。

秀二が２７歳を迎え間もなくして、「武勇伝」という格闘小説を完成させた。
だが、その間にも彼の周りで悲劇は起きていた。
彼の誕生日の２ヶ月前にはもう一人の師匠、坂本武蔵が病死した。
そして……

真里洲病院脳外科の女性の個室に秀二は入室した。
中に入ると兄弟子北斗が付き添いをしていた。
秀二が見舞いに来た相手とは北斗の妻だった。

「早乙女さん、どうですか？」
「美奈子、秀二が来たぞ」
美奈子というのが早乙女、いや神威の下の名前だ。
彼女の美しく綺麗な髪の毛は、手術と放射線の治療で今は無くなっていた。
彼女は脳腫瘍に侵されていたのだ。
しかもすでに言語障害、記憶障害といった症状が現れた。
「早乙女さん、武勇伝が、僕の始めての小説が完成したよ」

「しゅ、秀二くん、あな、たも、寝て、いなくては、ダメよ」
「俺はよくなったよ。今度は早乙女さんが良くなる番だ」
「あ、あの子、は、今日も、来ない、の？」
「あの子って？」
「あ、なたの、恋人」
「真奈ちゃんのことかい。今は休んでいるから来れないよ」

しばらくして早乙女は眠った。

北斗は静かに毛布をかけた。

「秀二」
「押忍」
「美奈子の余命は半年も無い」
「……」
「お前が真奈ちゃんを失った後、壊れた訳が今なら分かる」
「北斗さん」
「大丈夫だよ。俺は武道家だ。肉体だけでなく、精神も鍛えている」
「そうですね。ネットで小説家になろうというサイトに、僕の小説が載せてありますから、よかったら読んでください。あっ、でも今はそれど頃じゃないんですよね。スイマセン」
「悪いな。今は美奈子のことだけを考えたいんだ」
「押忍……では自分はこれで」
「ありがとうな」
「押忍」
部屋を出てそのまま非常階段のところに行き、彼は心の底から泣いた。

それから4ヵ月後に美奈子は空へと羽ばたいた。

誰にでも優しかった彼女が、真奈と同じ世界へと旅たった。

「君の優しさ忘れたくないから、君のためにも平和を祈る。華のように散っていった。君のために僕は祈る」

葬儀が終わり、帰宅した秀二は、何度も自分で作った曲「祈り」を歌い続けた。

元太、真奈、武蔵、美奈子のために歌い続けた。

そして２０１０年

彼は自伝を完成させた。

タイトルは「生きる時」だ。

最後のメッセージには自分自身のためにも、「忘れるな生きたくても生きれない人がいることを」と書いた。

最終章　「生きる時」（後書き）

ご愛読ありがとうございます。
この物語はフィクションですが、僕自身入院中に「生きたくても生きられない」人たちを見てきました。
そのために「祈り」という曲と呼べるような曲ではありませんが、ＣＤにして配布、販売までしました。
でもこの物語の主人公のように、一時期は生きる希望を無くし、世の中が嫌になった時期もあります。
おそらくこれからもそう思うときが来ると思います。
そんな自分自身のためにも「忘れるな生きたくても生きられない人がいることを」

平成２２年４月　生時

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9701k/

病気と闘う人たち

2011年3月24日23時43分発行